

## 第三期 充実期

【一九六八（昭和四三）年度～一九七八（昭和五三）年度】

### 一、学校施設・教育内容の両面で教育の充実

#### （一）現体育館の建設

旧体育館は、体育館としても講堂としても使つてきましたが、木造であり千五百名の生徒の活動に十分に対応できるものではありませんでした。そこで、一九七三（昭和四八）年六月に、新しく鉄筋コンクリートの体育館が、建設されました。これが、現在使つている体育館です。旧体育館に比べれば、最新式の大きな体育館でした。以後十五年ほどは、旧体育館と新体育館の両方を使って授業や集会や行事が進められるようになりました。

新しい体育館ができたとしても、全校生徒に入るには狭く、全校生徒対象の行事は外で行われました。始業式、終業式、全校生徒集会などは、天候が良い時は校庭で行われました。夏の暑い日でも校庭で集会や行事を行っていました。卒業式も卒業生と保護者で体育館はいっぱいになり、在校生は代表者のみが参列し、在校生全体とのお別れは、卒業式後に校庭で行われました。この当時は、運動場も狭く、体育祭も校庭ではとてもできないため、現在の世界イベント村にあつた県営グランドを使って行われていました。

#### （二）三十年受け継がれている学校の教育目標

どこの学校でも、教育目標を定めて教育が進められています。現在の伊奈波中学校の教育目標は、みなさんがよく知つているとおり、次のようなものです。

「いのちを愛し、なかまを愛し、はたらきを愛し」

ために考え、ために行う 生徒の育成

実は、この教育目標は一九七六（昭和五一）年に八代目校長 神谷福次郎先生により策定され、それが時代の願いを込め、今日まで約三十年間受け継がれてきました。

この学校教育目標の作成にあたって、神谷福次郎先生は後に次のように述べておられます。

『生徒達は一生、伊奈波中学校に在籍していたことは、忘れないものであり、消すことのできないことである。この学校名の「いなば」を使って「愛」を語ろうと考えました。「伊奈波」は平仮名の「いなは」の元の字である。これを使おうと考えました。そして考えて実行する子になつてほしいと思いました。それが、以下の通りです。「い」は命を愛し、ために考え、ために行う。「な」は仲良きを愛し、ために考え、ために行う。（当初は「なかま」ではなく、「仲良き」であった。）「は」は働きを愛し、ために考え、ために行うでした。「命を愛し」や「仲良きを愛し」は誰にもわかりやすいが、問題は、「働き

を愛し」でした。私はこう考えました。人間は、学問を学び、学問を身につけ、学問を使つて、よりよい働き方をして生きていくものである。国語は、言葉の働きを学ぶもの、数学は数の働きを学ぶもの、その他の教科も同じこと。赴任一年後から私の学校経営はそれで通してきました。』

何時か、伊中へおじやました時、同じ願いが伊奈波中学校に掲げられ、受け継がれていることを知つてうれしかつたと語つておられます。神谷先生が考えられたように、学校名「いなは」とかけたこの教育目標は、目標としては長い表現にもかかわらず、たいへん覚えやすく先生方や生徒たちに常に意識されてきました。一九八四（昭和五九）年度より「仲良きを愛し」は「なかまを愛し」に表現を変更しましたが、以後はそのまま引き継がれ現在に至っています。教育目標に込められる具体的な願いは、その時々の状況によつて多少変わることもありましたが、三十年経た現在でも、この教育目標がつくられた当初に、神谷先生が考えられた精神は、今も受け継がれているのです。

### （三）特殊学級の併設

整肢学園が伊奈波中学校の東隣に移転してきたのは、一九七五（昭和五十）年のことでした。学園では、肢体に障がいのある小学生や中学生が治療を受けながら、学習する教室がありました。この教室は、当時、伊奈波中学校の分教室となりました。伊奈波中学校の教材等も活用しながら学習が進められていました。その後、障がいに即した教育をいつそう充実できるように整備が進められ、一九七九（昭和五

四）年四月に岐阜県立希望ヶ丘養護学校として独立しました。しかし、独立後もすぐお隣であり、障がい者教育をはじめさまざまな交流がなされ、現在に至っています。二〇〇七（平成一九）年より、国の特別支援教育の推進に伴い、現在の希望ヶ丘特別支援学校と改称されました。

## 第IV期 変動期

【一九七九（昭和五四）年度～一九九七（平成九）年度】

### （一）校舎改築

#### （二）木造校舎から鉄筋の校舎へ

数々の困難に直面しながら増築され、多くの卒業生を送り出してきた校舎も老朽化が進み、木造校舎であつた中舎と南舎を鉄筋校舎へ改築する工事が始まりました。当時、鉄筋校舎であつた北舎（現在も使用）に平行して、校地の東側に木造二階建ての中舎と南舎の二棟があり、さらにその南に旧体育館がありました。北舎の鉄筋校舎三階建は一・三年生の教室として使用され、中舎と南舎は一年生の教室や理科室・金工室・木工室・図書室などの特別教室として使用されていました。木造の中舎と南舎は老朽化により壁などが崩れそうになり、より安全な校舎への改築が図られたのです。この改築により、校舎の配置は創立当初から大きくかわることになり、校地内の様子も一変しました。

この工事は、一九七八（昭和五三）年から始まり、年度ごとに校舎建築が進められ、正門も北側から

東側に移されました。一九八二（昭和五七）年三月、現在の鉄筋四階建ての南舎が完成しました。旧体育館を残して木造校舎の中舎と南舎は取り壊されましたが、その旧体育館も一九八六（昭和六一）年に取り壊されました。その分、運動場はとても広くなりました。しかし、この一連の工事により緑の庭園として親しまれたひょうたん池は、残念ながら埋め立てられました。代わって後になり、北舎と南舎の間の中庭に庭園の整備がされました。

### （二）格技棟の建築

その後、創立四十周年を迎えた一九八七（昭和六二）年三月、柔道と剣道のできる格技棟が、南舎の西側に建設されました。一階には金工室・木工室とピロティなどがあり、二階が柔剣道場です。これは現在も使用しているものです。その後も、さらに南舎東側の給食室及び東玄関付近の建設がなされ、こうした一連の工事は一九八七（昭和六二）年までかかりました。



完成した格技棟



校章「伊中のペン」をデザイン化した重層渡り

### （三）重層渡りの建設

一九九三年（平成四年）念願であつた北舎と南舎を各階ごとにつなぐ重層の渡り廊下が完成しました。それまでは、北舎の三階から南舎三階に移動するには、一度北舎の一階まで階段を降りて、南舎一階へ行き、今度は南舎三階まで階段を上がらなければなりませんでした。この重層渡りにより北舎の三階から南舎の三階へすぐに移動できるようになりました。しかも、この重層渡りは校章をデザイン化した建築がなされました。中庭の東や西から重層渡りを見てください。重層渡りの中央に「伊中のペン」がデザイン化をされているのがわかります。この重層渡りの建築をもつて、現在の校舎が完成をしたのです。

現在の南舎建築を始めて十四年後のことでした。



木造校舎が取り壊された後の校舎の全景

## 二、全国的な中学校荒廃の中

### (一) 児童生徒を育てる会の結成

一九八〇（昭和五六）年に、伊奈波中学校区児童・生徒を育てる会がつくられました。この当時は、日本各地で少年の非行が問題となりました。ことに、高校生や中学生による窃盗・シンナー吸引・暴力・性非行などの問題が多発していました。中学校でも窃盗・喫煙・暴力・器物損壊・暴言・いじめ・暴走・家出・深夜徘徊などさまざまな問題が発生し、中学校の荒廃といわれるほどでした。

こうした問題で、前途ある青少年が間違った行動に走ったり傷ついたりすることを防止しようと、全国的な取り組みをする組織がつくれられました。岐阜市内でも、自治会ごとに青少年育成市民会議がつくれられ、地域での取り組みがはじまりました。現在も、青少年の健全育成や青少年を不審者から見守るためのさまざまな活動に取り組んでおられます。しかし、この市民会議は、各小学校区を中心として取り組まれていたので、中学校区ごとに協力しあい、連携のとれた取り組みができるようしようということで、多くの中学校区で「児童・生徒を育てる会」がつくれられたのです。伊奈波中学校区では、この会に各地区の自治会連合会、青少年育成市民会議、各学校のPTA、小中学校の先生方が参加し、中学校区としての取り組みを相談しました。あいさつ運動や夜間パトロール、街頭補導を通じて、青少年への声かけが中学校区でも行われるようになりました。一九八三（昭和五八）年頃は、本校でもいくつかの問題を抱えていましたが、先生方やPTAや地域の方々の協力によって落ち着きを取り戻してきました

た。約三十年たつた今も、この“育てる会”的取り組みは受け継がれ、小学生や中学生の校外活動を積極的に支え、みなさんの安全に対する取り組みも続けられているのです。

### (二) 全国大会に出場 準優勝

一九八四（昭和五九）年、伊奈波中学校軟式野球部は、東海地区代表として奈良市で開かれた第六回全国中学校軟式野球大会に出場し、健闘しました。この大会には、全国十六ブロックの代表校が参加。伊奈波中は、一回戦で平和中（秋田県）、二回戦で城西中（鹿児島県）、三回戦で浜田中（島根県）と対戦して次々に勝ち進み、決勝に進出しました。八月二三日に城南中（大分県）と日本一を争い対戦しました。好試合を開催し城南中を苦しめ、接戦の末二対一で惜しくも敗れました。しかし、初出場で準決勝という立派な成績に輝いたのです。

翌日、選手たちは岐阜市役所に校長先生や監督の先



軟式野球部の全国大会出場を報ずる新聞

生にともなわれてお礼のあいさつに訪れました。キヤブテンは、「自分たちは持てる力を出し切って思う存分戦うことができた。悔いはありません。この経験を今後に生かしたい。」などと感想を語っています。これが新聞で報道されています。中学校の荒廃が叫ばれる時代の中にあって、中学生のすがすがしい姿を垣間見てくれた快挙でもありました。

### (三) 凌雲のつどい

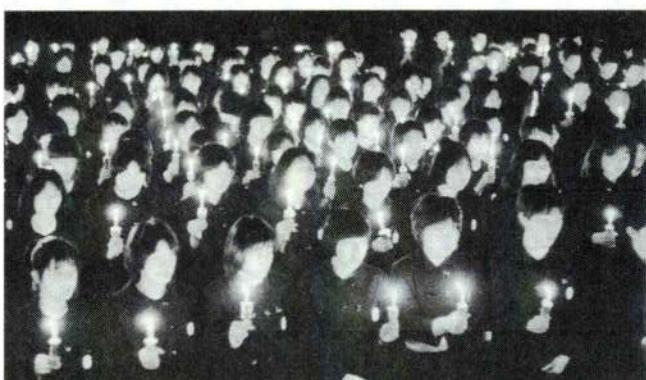
校内でのさまざまな問題がおこる背景には、きちんとした考えをもたないまま、みんながやっているからといつては、軽率で無責任な行動をとってしまう状況がありました。この問題は生徒一人ひとりが社会や家庭の一員としての自覚をもち、自分で考え、行動する力をつけ、毎日の生活を規律あるものにしようと自らの意志をもつて取り組む姿勢が高まらない限り、解決しません。こうした考え方のもと、伊奈波中学校で新たな取り組みが始まりました。

一年生は中学校への入学、三年生は中学校から卒業という節目にありますが、二年生は節目に当たるもののがなく、どうしても生活がゆるみがちになります。しかし、中学校二年生は満十四歳になり、昔で言えば男子の元服の儀式が行われた年です。この年頃になれば、判断力も行動力も大きく成長します。現在の少年法でも、十四歳を過ぎると社会的責任を負うことになります。『この時こそ、大きな志をもち、責任を果たせる力をつけよう。人間の成長の節目となる中学二年生に、「大人への自覚」をもつて

欲しい』という願いから、この取り組みが始められたのです。この取り組みは、伊奈波中学校の北門（現在は東門）の横にある「凌雲」の石碑にある『雲を凌ぐような大きな志をもつて欲しい』という願いから、「凌雲のつどい」と名付けられました。実施する時期は、「成人の日」の翌日、少々の寒さにも耐え、自立心をもつて欲しいということで、敢えて厳寒の冬と決められました。

第一回「凌雲のつどい」は、一九八六（昭和六一）年一月十六日に開催されました。このつどいには二年生全体と保護者が参加しました。開式の言葉、校歌斎唱に次いで、体育館のライトが消され、ろうそくの火が入場。各クラスの代表がろうそくの火を分けてもらい、それを全員に分けて回り、全員に火が行き渡ったところで、一人ひとり目を閉じて、自分の十四歳の決意を心の中で繰り返します。その後に、記念講演を聞いたり、意見発表をしたりして十四歳としての自覚を高めました。このつどいの取り組みは冊子にまとめられ、「私の将来と今努力すべきこと」「職場見学から思うこと」について全員のものが収録されました。

この「凌雲のつどい」は、それ以後も伊奈波中学校恒例の行事と



凌雲の集い

して第二回、第三回と続けられました。キャンドルサービスのやり方、誓いの言葉、意見発表、合唱などいろいろなセレモニーを先生方と生徒が共に考え、厳謹な行事になるよう工夫もされました。年によつては寒さが厳しく、さすが暖房施設のない体育館ではこたえました。寒さを辛抱している生徒に対し、PTAの委員さんたちが、親心で石油ストーブを生徒の両側に並べられたこともありました。

こうした取り組みにより、生徒自身の自立心も高まり、学校全体の規律も生まれてきました。この「凌雲のつどい」は以後十五年ほど引き継がれましたが、新たな時代の中で、別の集会にと形を変えていきました。

#### (四) 生徒会による「JOS活動」

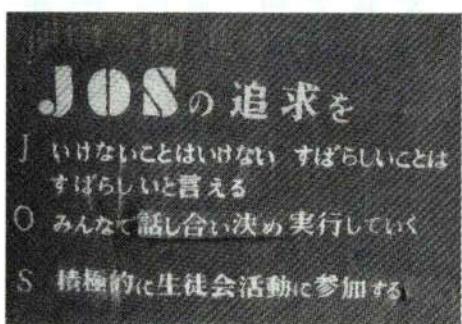
生徒会でも「規律ある学校、充実した学校、活力のみなぎる学校」にしようと話し合い、新たな取り組みを始めました。生徒会が大切にしたことは、自分たちで考えて学校生活ができること、つまり「自治」でした。

一九八七（昭和六二）年頃には、生徒会の執行部は自主的活動として、「JOSの追求」を提唱し、全校集会に諮りました。Jはjustice（正義、公正）、Oはorder（規律、秩序）、Sはself-control（自制、克己）を意味していました。その際、当面する問題に対処するため、三つの決議をしました。「いじめ、暴力をふるわない」、「授業に集中する」、「公共物を大切にする」の三つでした。

学級ごとに、教室の前面にJOSの標語を掲示し、「毎日の生活の中で、自分たちの在り方を見つめ直し、みんなで考え、改めるべきことを検討して実行し、学校生活を高めよう」と、生徒の自主的な取り組みをしました。決議した三つを「生活を見つめる視点」とし、問題があれば学級ごとに話し合い、全校集会で意見を出し合い、自分たちの力で生活を改善しようと取り組んだすばらしい活動でした。伊奈波中学校はこうした取り組みによって生徒一人ひとりの自律心を高め、新たな力を得ることができたのです。この「JOS活動」の取り組みは、以後、伊奈波中学校生徒会の大切な精神として、今も生徒会に引き継がれているのです。この先輩たちの取り組みに学び、自らやるのだという気迫を我々は決して忘れてはならないのです。

#### (五) 同和学習の取り組み

伊奈波中学校では、現在、人権同和学習が大切にされていますが、一九七八（昭和五三）年に早田集会所が開設され、地域ぐるみの同和学習の推進が図られ、本校においても、一九八〇（昭和五六）年同和学習への取り組みが本格的にはじまりました。一九八九（平成元）年には、文部省指定の同和教育発



学級ごとに作成されたJOSのパネル

表会が早田小学校と共に行われ、地域活動のひとつとして「早田太鼓」の取り組みも新たに起されました。落ち着いた雰囲気の中で、人としての在り方を真剣に考える授業の姿は、参観者からも高く評価されました。以後、人権同和学習へと内容が発展してきましたが、この学習は今も脈々と続いています。

#### 【岐阜大学付属病院内に病弱学級を開設】

岐阜大学付属病院が司町にあつた頃の一九九六（平成八）年四月、病氣で長期入院している小学生や中学生のために病院内に教室が開設されました。病院に近い、京町小学校と伊奈波中学校の分教室として両校の先生が分教室で指導にあたり、個別の学習が進められました。この学級は、京町小学校の校庭にある「むくの木」にちなんで、「むくの木学級」と名付けられました。二〇〇四（平成十六）年四月 岐阜大学医学部付属病院が黒野に移転すると共に「むくの木学級」も移転し、岐北中学校に移管されました。

#### 【イタリア フィレンツェ市 グラムシ中学校と交流】

一九八八（昭和六三）年十一月、岐阜市教育委員会イタリア訪問団に学校長参加。一九九二（平成四）年十一月、岐阜市友好都市親善使節団派遣。一九九六（平成八）年九月、フィレンツエ市長来校。一九九九（平成十二）年七月にグラムシ中学校生徒来校。二〇〇五（平成十七）年一月にイタリア吟遊詩人リッカルド・マラスコ氏来校。などの記録が残っているが、最近は交流が途絶えています。

### 第V期 教育内容の改革期

#### 【一九九八（平成一〇）年度～現在】

##### 一 教育改革の波

###### （一）教育改革

一九九二（平成四）年九月より全国で学校週五日制が導入され毎月第二土曜日が休みとなりました。さらに二年半後には第四土曜日も休みとなりました。二〇〇一（平成十四）年度からは、完全学校週五日制となり、すべての土曜日が休みになりました。この制度の導入に向け、減少する授業時間数に見合った学習内容が示されると同時に、総合的な学習が導入されたり、選択教科の幅が拡大されたり、英語学習が強化されたり、情報教育が導入されたりと新たな学習も加わってきました。

###### （二）情報学習への取り組み

伊奈波中学校では、新たな学習の中でも情報学習への取り組みを重点的に進めました。一九九九（平成十一）年にインターネットを活用した学習を充実させるため、情報設備の整備がなされ、積極的な取り組みが進められました。先生方も情報を活用した学習の指導や教育事務の効率化を図る取り組みをされ、岐阜市内の先進校としての役割を果たしました。

生徒がパソコンを使って学習を進めたり、学習した成果をパソコンを使って発表したりすることが具体的に進められました。こうしたことが総合学習で生かされ、自分たちの調査や体験したことなどを多くの人に理解してもらえる資料整理に活用するようになつてきました。さまざまな情報を収集し、考え方を急速に高めていったのです。

## 二、地区生徒会の取り組み

### (一) 地区生徒会の発足

二〇〇三（平成十五）年度から、伊奈波中学校では地区生徒会の取り組みが始まりました。以前から、中学校には生徒の力でよりよい学校生活を送るための生徒会がありました。一年生から三年生までの全生徒の参加によるこの生徒会とは別に、学校週五日制への切り替えに伴い、校外で地域との関わりを高めるために、地区ごとの全生徒による組織をつくったのです。当時は、全校生徒が十八の地区に分かれ、それぞれに地区代表が決められました。その中から地区生徒会の会長が決められました。

地域と日常的にかかわりをもつたための第一歩として、校外において、地域のために活動する計画が立てられました。それが、地域清掃活動「アクティブ伊奈波」です。以前から、地域の清掃や早田川の清掃などをやつていましたが、地域への感謝の気持ちを表すための取り組みでした。地区生徒会での活動が、これまでと違うのは、中学生も地域の一員としての自覚を持ちながら、地域の方と一緒になつて取員としての意識を高めてきました。

### (二) 中学生は大切な地域の担い手

伊奈波中学校区においても、急速に少子高齢化の時代を迎えていました。地域によつては小学生や中学生が数名しかいない町内や一人もない町内もできました。逆に、高齢者の数はどんどん増えてきました。小中学生の減少により、地域と学校のかかわりは少しづつ薄らぎでできました。

高齢化する地域社会にとつては、中学生や高校生、青年層はこれまで以上に重要な存在となつてきました。中学生といえども、災害など緊急時の地域での取り組みや地域活動の一翼を担える力は十分備



アクティブ伊奈波（地域の人と共に清掃）

わってきています。また、地域の文化や伝統は、小中学生や若い世代を通じて次世代へと引き継がれていきます。引き継ぐ若い人がいなければ、途切れてしまいます。

保護される対象から脱し、地域を担う自覚と責任をもつた住民としての意識と行動力をそなえた中学生になつて欲しい。中学生も地域住民の一人として、学校でも地域でも活躍してほしいという期待が大きくなつてきました。そんな中で、地域の防災訓練にも生徒が参加するようになりました。水防団の方から土のう作りを、日赤奉仕団の方から三角巾の使い方を教わったりしながら、地域の自主防災について体験的に学び、地域の一員としての自覚をもつて、その責任を果たそうとする中学生の姿も見られます。ようになつてきたのです。こうした姿は、高校生になつても青年や社会人になつても大切にしてほしいものであります。中学校を卒業しても地域の一員として参加してほしい、声をかけあえる関係をいつまでも保ちたい。そんな願いをもつて地域の方々は伊奈波中学校の生徒を見守つておられるのです。



地域行事に参加する中学生



防災訓練に参加する中学生

## おわりに

学校創立から現在までの伊奈波中の移り変わりにふれ、みなさんはどんなことを感じましたか。何気なく過している普段の学校生活の中にも、地域の方々や先輩たちの築いてきたものがたくさんあることに気づいたと思います。こうした歴史や伝統が私たちを育んでいる学校だからこそ、私たちは伊奈波中学校を大切にしなくてはなりません。これまでの歩みを理解し、先を見通し、これからも新たな課題に挑戦し、伊奈波中の歩みを創り出して欲しいと願っています。

数年後には、六十数年の歴史と伝統ある私たちの伊奈波中学校も、その幕を閉じることになつています。これまで積み上げられてきた伊中の精神・歴史・文化が、新しい時代の流れの中で、新たな学校の文化を生み出すもとになればと強く願わずにはいられません。

在校される生徒のみなさん、伊奈波中学校を愛し、この学校の生徒であることに誇りをもち、未来に向け一層の努力を積んでください。そうすることが、この伊奈波中学校を創り、この伊奈波中学校を愛した先輩諸氏や指導にあたられた先生方、学校のために努力していただいた地域の方々に報いることになると思います。最後になりましたが、作成に携われた方々や協力いただいた方々に対し、心からお礼を申し上げます。

〈追記〉

それぞれの時代にたくさんできごとがあつたと思います。一つ一つを丁寧にひもとき、整理し伊奈波中学校の歴史に位置づけることが、本当はとても大切なことだと思います。しかし、学校の歩みをひも解こうとしても、記録されたものは断片的なものしかありません。他には、人々の記憶に残る話をつづりあわせるより他に方法がありません。したがつて不十分なことが多いことは、やむを得ません。もし、この冊子を目にされ、こういうこともあつた、こういうことが今の伊奈波中学校に大きな影響を及ぼしているということがあれば、是非教えていただき、記録として残しておきたいと思います。

卒業生の皆さんと学校を育み支えていただく地域の皆さんのお益々のご活躍を祈念します。

平成二十年六月

「歩む伊中」作成委員会

**(資料一) 伊奈波中学校歴代校長の座談会**

平成一九年八月十日に、伊奈波中学校南会議室にて開催

参加者	七代校長 加藤 義勝 先生	十六代校長 土田 繁男 先生(司会)
十代校長	内田 英夫 先生	現校長 岡本 裕一 先生
十一代校長	林 喜八郎 先生	現教頭 柴田 伸昭 先生
十二代校長	尾崎 和美 先生	PTA会長 村瀬 元宏 氏
十三代校長	山口 正治 先生	〃副会長 河合真奈美 氏
十四代校長	土田 鴻 先生	〃書記 松原由美子 氏
十五代校長	酒井 寛 先生	

岡本裕一 校長先生

本日は、暑い中をありがとうございました。六十年を経た伊奈波中学校も、平成二四年には、川北の中学校と川南の中学校に分かれそうです。これまでの伊奈波中学校の歩みを整理する上でもこうした会がもてることに感謝しています。在任された当時のお話をいろいろうかがえればと存じます。

司会者

伊奈波中学校が開校して六十年を迎えます。様々な方々の努力の積み重ねにより、今日の伊奈波中学校があります。今日は、第七代校長加藤義勝先生はじめ八名の歴代校長先生に集まつていただき、それぞの時代の学校のようすについてお話を伺いたいと思います。今日は、たいへん残念ですが、体調がよくないということで、神谷福次郎先生と住 積二郎先生は欠席です。なお、神谷先生からは資料を送付いただきましたので、皆さんにお配りします。住先生は目が悪いということで文書にはできないとのことでしたが、皆さんによろしくお伝えしてくださいということでした。六十周年を迎えると同時に、岐阜市では近い将来、川南に中学校を新設する計画をされています。そうなれば、現状のままで伊奈波中学校が存続することはないと考えられます。そんなことで、歴史と伝統のあるこの伊奈波中学校の歩みを改めて整理したいと考え、本日はお集まりいただきました。では、ただ今より歴代校長先生の座談会を開催いたします。よろしくお願ひします。最初に、昭和四十年代に校長として赴任されました加藤先生お願ひします。

加藤義勝 先生

在任中に生徒が一番困っていた金華校区から金華橋へ渡る所に「何とか歩道橋が欲しい。」その時の自治会長さんやPTA役員の尽力で、歩道橋が昭和四六年度に完成し、落成式に参加したこと覚えて

います。

私は、伊奈波中学校の前には、高富中学校に勤めていましたが、高富中学校では部活動を教育の柱として頑張っていました。突然に、伊奈波中学校への赴任が決まりびっくりしましたが、ちょうど部活動が社会体育に移行する時で、しかも長良中では、すべてが組織的に動いていました。岐阜市全体も社会体育の方向で進んでいました。当時、県の中体連の副会長をしていましたが、伊奈波中学校に赴任すると同時に、中体連の会長職を務めることになりました。県の中体連と社会教育としての部活動がどういう関係になるのかということが心配でした。職員会や様々な会で話を伺っていると、岐阜市では社会体育に移行することが何か物理的な面だけを表にして、教育としての部活動が中学校教育のひとつの中であるということをしつかり踏まえての移行ではないような気がしていました。中体連の会長でもありましたので、当時の状況に沿った社会体育への移行という形で動きました。

社会体育に移行するということは、社会体育の指導者と、現在の部活動を一生懸命やっている人とのかかわりを考えてみると、うまくできるのには十五年～二十年かかるのではないかと思っていました。けれど、私の四年間は中体連の会長をやりながら校長会の立場を打ち出すことはまだできなかつたです。東海北陸中学校長会の研修会当番が昭和四六年にあたり、体育指導関係で岐阜県の中学校体育指導について、どのような方向に進んでいるかを報告しました。他の三重・愛知・静岡・福井・石川・富山の校長会代表者からは一斉に反対されました。講師の先生の講評もあいまいでした。大きな課題でした。

うまくいかなかつたこともあります。伊奈波中の生徒は都会の生徒ですので、土に親しむ何らかのことがしたいと考えました。そこで、校庭の緑化をしようと考えました。県岐商との間に、一五〇坪ほどのバレー・ボールコートが空いていたので芝の苗を取り寄せました。先生方に迷惑をかけてはいけないと思い、私一人で一年間かけて苗づくりをしました。それだけでは足りないので、PTAの協力で校庭に植えるだけの苗を寄贈してもらい、生徒の力を借りて植えつけました。うまく、苗がつきまして、青々した運動場になつた頃退職しました。しかし、生徒の人数が多いので踏んでしまうのではないかと親も私も一番心配しました。結果は、その通りになつてしまいました。残念な思いがありました。退職後、聖マリア高校に勤めましたが、そこでもう一度やつてみようと思い、校庭の緑化をやりました。聖マリア高校では、人数が少なかつたので、前を通ると二十年くらいは青々としていました。やはり、生徒数が多いことをもつと考えるべきだったと思いました。これは私の失敗談です。

#### 司会者

加藤校長先生の時には、視聴覚教室（現在北舎二階の学習室）が作られました。今の体育館も加藤校長先生の時に落成しました。先生が退職される時に、東隣に下呂から整肢学園が移転し、当初は伊奈波中学校の分教室になつていきました。

金華橋の歩道橋の話は初めてお伺いする内容です。社会体育や校庭の緑化の話は、私が教諭として勤

務していた時のことであり、現PTA会長村瀬さんも中学生の時のことと共に取り組んだ記憶があります。話があれば、また後でお願いします。続いて内田先生お願いします。

#### 内田英夫 先生

久しぶりに懐かしい伊奈波中学校の校門をくぐると、本館と北舎の間に校章をイメージした時計台をかねたような重層渡りがどつしりと構えて私を迎えてくれました。あれほど構造上難しいといわれていた重層渡りの実現と、校舎内がとてもよく整備されていることに、伝統と誇りの金ペンに輝く伊奈波中学校の姿を見て大変心強く感じました。

赴任した時には、旧体育館がまだ残っていました。ずいぶん傷みもひどくなつていて幸い、体育馆が二つあるということもあり、男子も女子も文科系・体育系共に部活動は活発で成績も上位を占めていました。例えば、野球部もソフト部も東海大会に進んで優勝し、全国大会や西日本大会にも出場し活躍しました。この頃、部活動は盛んでした。

当時は、全国的に学校荒廃の時代でしたから、県下有数の大規模校として「みずみずしい爽やかな少年少女が、精一杯自分の力を出し切っている学校」をめざそうとした時、まず生徒たちに自律心をもたせることが必要だと考えました。

ところで、一年生は中学生になつたという意識から緊張して取り組んでいる。三年生は修学旅行・就

職・進学の問題もあつてほんやりはしていられない。問題は二年生で、中学生活にも慣れて気分的にもゆるみが出てくる。それに十四歳になれば、少年法に定められた社会的責任を負うことになる。だから、人生の節目となるこの時に、「大人への自覚」をもつてもらいたいと始めたのが「凌雲のつどい」です。時期は、「成人の日」の翌日、一月十六日とあえて決めました。講演会の講師には、岐阜盲学校の中澤義雄先生、先輩の大洋通商（株）社長 篠田喜作氏、中日ドラゴンズの高木守道氏に来ていただきました。その他、中学校への希望と期待に胸を膨らませている一年生には、国立乗鞍青年の家での「集団宿泊研修と自然教室」を実施したり、観光的な修学旅行も考え直そうとしました。なお、創立四十周年には、秋の体育大会をPTA参加の運動会にし、続いて文化祭も格技棟の完成の祝賀をかねて、菊香る秋にふさわしい菊の花の「ボード・アート」をPTAの皆さんのが作成し、新しく建築された格技棟の一室に展示し、生徒たちと喜びを共にしました。

また、生徒会の自治活動として、昭和六十二年には、生徒会活動として「JOSへの追求」の取り組みを始めました。Jはjustice、Oはorder、Sはself-controlのそれぞれの頭文字で、規律ある学校、充実した学校、活力のみなぎる学校づくりにと、先生方も一枚岩となつて生徒達と共に努力した二十年前を懐かしく思います。

#### 司会者

昭和五〇年代半ばから六〇年代の時代は、全国的に学校荒廃が叫ばれた時でした。そんな中で、「凌雲のつどい」が始まつたり、お話をあつた「JOS活動」などが取り入れられたりしました。「JOS活動」を常に意識できるように、学級ごとにパネルをつくり、各教室に掲げていたものが今もいくつか残っています。そのひとつがこの部屋にもあります。この時代は、中学校教育を見直す時代でもありました。その後を受けられた林先生お願いします。

#### 林 喜八郎 先生

私は、昭和六十三年十一月にフィレンツエに行きました。友好校であるグラムシ中学校とソルガネ小学校を訪問して、こちらの子どもの絵画作品を贈り、向こうの作品ももらつてきました。それぞれの学校で大歓迎を受けました。小さいカップで濃いコーヒーをいただきました。グラムシ中学校では校舎内を案内され、授業参観をしました。校舎内のあちこちに落書きが多くたこと、体育の時間にジャンパーのまま参加している子、みんなと一緒に運動しない子のいたことが気になりました。当時の日本の生徒たちにはあまり見られない姿であり、自由を育てるには画一的にそろえない方がよいのかなとも思いました。生徒の作品では、写生画に興味をもたれました。住宅や電柱、電線のある町の絵から生活のようすなどを尋ねられ、会話がはずみました。

この年の修学旅行は、能登の柳田村へ行き、農家に四、五人ずつ分かれてホームステイして、農作業

をしたり家族と団らんしたりする体験学習をしました。柳田中学校の生徒とも交歓会を行いました。

新しい形の修学旅行ということで、全国的な機関紙「修学旅行」にも掲載され、各地から問い合わせもあり、注目されました。しかし、次の年には実施できなくなりました。当時、柳田村が村おこしの一環として修学旅行の受け入れを計画されました。はじめのうちはよかつたのですが、軌道に乗りかけたら、地元の旅館組合の反対にあい、県の保健所から指導もあり、柳田村の計画は中断してしまったのです。

農家の方々も生徒たちも楽しみにして好評だったのに、たつた一年で中止になり残念でした。

当時、部活動は伝統的に活発でした。運動部は互いに競い合って優勝をめざして練習に励んでいました。二学期の始業式には、夏季大会の結果を全校生徒に発表し、優勝旗やカップを紹介しました。優秀な選手は県の代表として全国大会に出場した者も多くいました。

北舎と道路の間にあつたポプラの大木を切りました。このポプラは開校当時からあつたといわれ、立派にそびえておりました。しかし、この枯葉が落ちて周辺一帯にたまり、雨どいにつまるなど多くの苦情をいただいておりました。切るにはかなりの経費もかかるので、PTAにお願いしてご理解を得て切りました。近所の方々から感謝され、教室は明るくなつて万事好都合だったのですが、ちょうどその頃、市内の他校でも校地内の大木を何本か切つたことが市議会で、問題となりました。緑化運動を進める時にどういうことかということでした。そのとばつちりが、うちに来るのではと心配しましたが、何事もなくホッとしました。

平成元年度に県の同和教育の研究指定校として発表会をおこないました。生徒が落ち着いて授業に取り組んでいる姿を見て、参観したある中学校長は、「伊奈波の生徒は、いいねえ。」と私に話してくれたことを覚えてています。

校舎建築については、何度も建築をお願いしていた重層渡りが、私の退職する年（平成三年）に完成しました。

#### 司会者

先生の時代に取り組まれた同和教育は、今でも伊奈波中学校教育の柱になっています。では、尾崎先生お願いします。

#### 尾崎和美 先生

私が赴任した時には、校舎の改装がほぼ完成し、明るい雰囲気になつていました。その後、中庭を作り、その頃から現在まであまり変わっていません。伊奈波中のペンの校章は、「ペンは剣より強し」というふうに感じ、とても好きでした。もう一つ好きなことが教育目標。これは、すばらしい。漢語が使つてなくて和語でやわらかい。好きだったので、総ての教室にパネルにして掲げてもらいました。学校通信にも入れてもらいました。

伊奈波中の生徒は、パワフルでバイタリティーのある子が多く、多様性、独創性をもつた子も多かったです。その頃、阪神大震災があつてボランティアに行つた子もいました。そのような行動力をもつた子が多かった。伝統ある地域に生まれ育つたからでしょうか。

部活動では、夏が終わるとステージに並べられないくらいに優勝旗が一杯並んでこれは子ども達のよい励みになつてよかったです。文化系もよくがんばっていました。

発想が豊かな子ども達が多かったといいましたが、PTAも組織運営がしつかりしていて、力をもつた人が多く、普段は五十%で動いていて、いざという時は一〇〇%の力を出し切つてすごかつた。

伝統を守り、それを発展させていくのが私の信条で、いろいろな生徒の活動を見学型から体験型へ移行しました。二年生の職場体験も見学型から体験型へ移行させ、体験先が親さんの紹介で百二十軒くらい集まり、一軒あたり三、四人で体験できました。夏休みの課題であつた「一研究一作品」だったものも「夏に挑む」として体験型の課題も取り入れました。

#### 司会者

加藤校長先生の在職された時代、村瀬会長さんの中学生の時代の伊奈波中学校の校舎配置とは、昭和五十年代中頃から大きく変わってきます。尾崎先生の言われたように、平成四年以降校舎のようすは、ほぼ今日の姿になってきた。また、この頃から本校は大規模校から少子化により、適正規模の学校に

なつた時代です。その時代のことについて山口先生お願いします。

#### 山口正治 先生

一年目は生徒指導、二・三年目は生徒指導と共に部活動という感じの三年間でした。というのも、中体連の全国大会を岐阜で行つたからです。

生徒指導で始まり、生徒指導で終わつた。今思えば、一部の動きに振り回されていたようにも思います。赴任した時には、いろいろな問題行動がありました。いじめの問題があつたのですが、問題に悩む子が「先輩もやさしいし、部活も上手だし、私は伊奈波中が好きです。伊奈波中の仲間が好きです。伊奈波中を卒業したいです。」と話してくれた。このような発言をしてくれたことで子どもたちも学びあうことができました。いじめが起きたことは、残念なことでしたが、他の生徒達も救われたと思います。この年には、他にも、授業妨害、授業抜けだし、不登校などの問題があつましたが、関係機関との連携を図つて支援を受け、PTAの方々の積極的な取り組みにも助けられました。当番制による授業参観、夜の懇談会も行されました。本当によくやつていただきました。

部活動では、私が中体連の会長であつたことや大会会場周辺の学校ということもあつて、多くの生徒が補助員として全国大会を支えるために活躍をしてきました。吹奏楽部も大会に協力しました。サッカー部は大会へ出場し、ベストエイトになりました。部活動を柱にしながら、生徒指導にあつたた

三年間でした。

土田 鴻 先生

平成十年十一月六日からフィレンツエ市へ高校生も入れて、十一名を連れて行きました。平成十一年には、フィレンツエの姉妹校から生徒が岐阜へ来ました。ホームステイをしたいということで、PTAの方々の協力を得て、ホームステイの家族を募つて対応しました。習字、鵜飼、京都旅行などをを行い、作品交換だけに終わらず、いろいろな交流をしました。京都旅行のバスの中で、むこうの子から質問を受けました。「日本の文字はどうなっているのか。漢字、カタカナ、ローマ字などいろいろとある。上から読むのか。下から読むのか。右から読むのか。左から読むのか。斜めに書いてあるのもある。」この質問で、日本の言葉のむずかしさや言葉の乱れにも気づきました。

今もあると思いますが、情緒障害児学級を設置しました。いろいろなタイプの生徒も見られるようになり、個々の指導を大切にしていこうと考えて新設しました。

平成十三年度には、インターネットを活用した情報教育を推進しようということで、推進校となつて、校内LAN工事が始まり、パソコンも一人一台使えるように四十台入りました。先生方にも研修してもらつて、ペーパーレスの職員会議を始めたりしました。

私は、専門が技術家庭科なので校務員さんと相談して花作りを始めました。いっぱい育った花の苗は

小学校にも配りました。生徒のボランティアと共に花いっぱいの学校にして平成十二年花いっぱいコンクールで表彰されました。

PTAの会長さんは、県PTA会長だったこともあり、PTA活動も活発で協力的で助けられた。卒業式の卒業証書授与を以前は学級ごとの代表一人が授与していましたが、生徒数も減少していましたので、校長から一人一人のすべての子に手渡すことにしました。

平成十三年度四月から学校評議員制度も始まり、評議員に、これから伊奈波中学校に子どもを送つてくださる若い人にもお願いしました。

近くの公園の清掃活動も始めるようになり、環境衛生優良校に選ばれたことも印象に残っています。

酒井 寛 先生

歴代の先生方のおかげで、僕が赴任した頃は、普通の学校になつていました。平成十四年 学校週五日制が完全に始まりました。土・日曜と続けて休みになるので、地域の受け皿作りをどうするのかが、課題のひとつでした。公園清掃を“アクティブ伊奈波”という表現にしました。以前は、クラス単位で場所を決めて清掃をしていましたが、単なる奉仕ということでクラス単位で清掃をするのではなく、生活している地区ごとに分かれ、地元の清掃をするのが良いのではないかと思い、「伊奈波中校区の児童生徒を育てる連絡協議会」を通して、地区生徒会を立ち上げました。最初は二十の地区生徒会でした。こ

れは中学校の教員数にあわせて作りました。二年目は、十八地区にしました。教員が先頭に立つのではなく、地区の担当の人と共に運営していく。地域の運動会・文化祭などの行事にも打合せから参加し、自分たちで地域の一員として参加することをめざしました。伊奈波中は落ち着いてきていましたが、まだ地域の人たちは、"中学生は怖い"イメージがあつたので、行事などを通して実際に見てもらつて理解してもらえるし、伊奈波中は変わつてきているなあ、未来が托せると思つていただけの地区生徒会になつたと思いました。

土田鴻校長の頃から、伊奈波中は七月九日岐阜空襲の記念日のイベントに参加していました。私の時に、伊奈波中三年生に合唱を依頼され、修学旅行が広島の平和学習とともに、関連があるので権現山で合唱を奉納しました。三年生だけではなく二年生・一年生にも岐阜空襲を知つてもらおうと、重層渡りで市歴史博物館から借りた十枚ほどの写真を使って岐阜空襲の写真展を開いたりもしました。お金がないこともあって、フィレンツェとの交流は途絶えていました。作品を送つたが、向こうから作品は送つて来ない。以前は、岐阜市役所で国際交流の展覧会をやつていたが、それもなくなつた。しかし、三年目にいきなりフィレンツェの吟遊詩人リッカルド・マラスコというギター奏者が来て演奏会を行つたが、それだけのことでの終わつていて。

給食について改善を図りました。一年生は北舎の三階から急いで給食室へ来て、そこから北舎三階まで運び上げるため、汁物をこぼしたりしていたので、エレベーターを再開しました。但し、異物混入の

問題があるので、先生方にもついてもらい再開したのです。

#### 土田繁男 先生

私は、本校に二度目の勤務でした。若い時代に、加藤校長先生、神谷校長先生の下で七年間をこの学校で過ごしました。二度目の赴任で、何とか先輩の先生方の思いを受け継ぎながら、教育課題に取り組んでいきたいと考えました。引き継ぐとえたことは三つでした。一つ目は、生徒の自治力です。先ほど、内田校長先生の話にもあつたように、JOSの精神を掘り起こし、自治自淨力を高めることでした。二つ目は、酒井校長先生から話のあつた地区生徒会の活動を通じて地域と一体となつて中学生が生きる力をつけることでした。三つ目は、凌雲の精神を引き継ぐことでした。この三つのことを学校運営に反映させようと考えました。

JOSの取り組みでは、現生徒会でも取り組むようになり、伝統を大切にした新たな活動への展開を考えました。かさ紛失事件にも生徒会が問題意識を持ち、先生方と一緒に化して取り組んでいました。地区生徒会の取り組みでは、これまでのアクティブ伊奈波に加えて、地域行事への参画をいつそう強化しました。どの校区でも、自治会長さんや青少年育成市民会議の方々のご支援を受け、地域ごとの清掃活動に参加したり、地域防災訓練へ参加したり、広く地域活動に地区生徒会ごとに参加するよう学校からも地域からも働きかけてもらい、少しづつではあるが地域の方々とのあいさつや交流が持てるよう

なってきたと思います。

校長としては、機会あるごとに、私が最初に勤務していた当時に決定された学校教育目標「いのちを愛し、仲間を愛し、はたらきを愛すために考えために行う」と「凌雲の志」について語りかけてきました。そこに込められた願いを是非とも在籍する生徒には伝えたいという一念でした。いつも目先のことになるとわざず、先を見通し志をもつて自ら行動することについて話しました。どれほど、生徒の心に響いたかは分かりませんでしたが、生徒の口から凌雲の言葉が出てくると、たまらなくうれしかった。

こうした伝統を引き継ぎながら、学力を高めることが課題でした。当時、日本の子ども達の学力低下が全国的に危惧されました。私には、伊奈波中学校の生徒の学力が低いとか高いといった問題よりも、一人ひとりの生徒が自分の持てる力を十分に發揮し、日々向上に努力しているかどうかという点で危惧を抱いていました。一人ひとりの力をどう發揮させるか。体験学習の重視、三年生全員による天体望遠鏡作成と観測、トレーディングゲームの導入による五日間の職場体験学習、体験を重視した総合学習や宿泊研修、基礎学力推進のための朝学習、など様々な取り組みをお願いしました。生徒たちは情報に流れやすくなり、個々に様々な問題を抱える生徒もいて、先生方には苦労かける面はありました。全体としては、落ち着いた学校の中で、じっくりと取り組む生徒が増えてきた印象をもっています。何よりも地域の方々が温かい目で生徒を見てくださっていることがうれしかったです。

### 村瀬元宏会長

その時代時代に、伊奈波中学校が多くの中学生を育成してきたことがよくわかりました。私の在籍した時代は、一学年十二クラスある千五百人ほどのマンモス校の時代で、先生の数も多く、職員室に先生方が入りきれず、それぞれの準備室においてになつた時代で、先生方の名前も全部はわからないような状況でした。部活動等もとても活発であったことを覚えてます。お話を伺っていて、いろいろなことがあって、今日に至つていることがよくわかりました。五年後には中学校の状況が大きく変わりますが、こうした歴史と伝統をもつた伊奈波中学校があつたということをしつかり残していくようにしたいと思います。ご協力のほどよろしくお願ひします。

### 司会者

それぞれ時代の世相を映し出しながら、各時代の校長先生を中心にして、各先生方と保護者や生徒が、共に課題に立ち向かいながら歴史を作り、今日に至つたことが感じられました。六十年の節目を迎えますが、やがてこの学校は新たな時代の要請で今とは違った形になつていきます。しかし、ここに伊奈波中学校あり、わが青春の原点はここにありと感じておられる二万六千余名の方々の思いを引き継いでいくことができたらと思います。学校の歩みをまとめるにあたり大切にしたい思いであります。本日は本当にありがとうございました。